

夢みる心をいつまでも

講師

永田 萌

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館長

1. はじめに

こどもみらい館の館長に就任して、市内のいろいろな園の保育の現場を見せていただく機会があり、本当に楽しみにして参りました。この2年、それがかなわないのですが、基本的には私の子どもの頃と変わらないと思います。人間にとって幼児期というのは、どんなに時代が変わっても最も大切な心と体の成長期で、保育園・幼稚園で過ごす環境がいかに大切かということを私自身の経験からも感じております。

2. 私の原点～幼稚園での体験～

年長の時の出来事です。私は、京都に長く住んでおりますが、出身は兵庫県加西市というところでは。当時は珍しいカトリック系の幼稚園がオープンし、そこに通うことになりました。私の母は、新しい物の好きな人で、きっと私にそういう新しい教育を受けさせたいと思ったのでしょう。幼稚園は、随分離れていて、今なら幼稚園児が1人で歩いて行くななんてとても考えられませんが、当時は園に行く道の方々がみんな知り合いです。今考えると地域の見守りがしっかりしていたんですね。村の友だちはみんな、村のお寺の保育園へ行きましたので、一緒に幼稚園に行く友だちがいなし、割と内向的な子どもだったということもあり、幼稚園へ行ってもなかなか仲良しが出来ず、ひとりぼっちでした。でも、ひとりぼっちがそんなに寂しいわけではありません。大人になって『子どもには1人でいる時間が必要だ』と本に書いてあり納得しました。私の経験では、1人というのは割と心地よく、そんなに苦痛ではありませんでした。無理やり自分を励まして友だちと遊ぶよりは、1人で好きなことをしている方が楽しい

ということもあります。私は1人で地面に絵を描くことが楽しかったんです。

若葉が茂る季節、園庭の大きな木の葉っぱが、レースのような美しい影を落としていて、その白と黒の対比を「ああ、綺麗だなあ」と思いながら、地面に絵を描いていました。後ろから担任の先生が近づいてきて「何してるの」と声をかけてくださったので、ドキドキしながら「絵、描いてるの」と言うと「そう、絵が好きなのね。あのね、みんなが外で遊んでいる間に、先生と一緒に絵本を見ましようか」とおっしゃいました。先生と2人きりで教室に入って絵本を見るなんて、ドキドキするけどすごく嬉しくて、一緒について行きました。絵本棚の高い段には、子どもには少し難しい読み物系の絵本が幾つも並んでいます。先生は、その中の1冊を取って床にペタッと座ると、私を膝にのせてくださいました。何とも言えないいい香りとやわらかい感触を今でもはっきりと覚えています。お母さんとも全然違う、憧れの先生が、抱っこして目の前に広げた絵本を綺麗な声で読んでくださったので、ものすごく嬉しくボーッとしてしまいました。その絵本は少し難しいお話で、内容はよくわかりません。でも、先生の腕の感触とか優しい声が一つになって、その声が耳からではなく体から入ってきて、本当に幸せな時間でした。

そして、あるページに来た時に、私はドキッとしました。先生も、私の反応に気づいて「ちょっと怖いね。大丈夫、大丈夫」と言ってくださいました。その絵は、今でもはっきり覚えていません。美しいお部屋、寝室です。大きな綺麗なベッドがあって天蓋という上からの覆いやレースのカーテンが下がっていて、そこに美しい男の人と

美しい女の人がとても幸せそうに寄り添って眠っています。カーテンのこちら側に、片手に短剣を持った女の子が立っていて、そっと覗いています。さあ、これは何の絵本でしょう。ヒント、この短剣は、女の子の5人のお姉さんの髪の毛と引き換えに、魔女に頼んで作ってもらったものです。この絵本は、アンデルセンの『にんぎょひめ』でした。私がドキッとした挿絵は、人魚姫が短剣で王子様を刺そうか、どうしようかと迷っているシーンでした。先生が「大丈夫、大丈夫」と言ってくださり、ドキドキしながら最後まで聞くことが出来ましたが、私はこの時とても悲しい気持ちでした。でも、こんなに悲しいお話なのに、絵がとても綺麗なことに気づきました。今改めて見ても、怖くはない、とても美しい絵です。ただ、悲しい。子どもがこの絵を見て“なんて綺麗で、なんて悲しい絵なんだ”と思うんですね。思い返すと5歳の頃の私は、美しいことは綺麗で楽しいこと、悲しいものはまた別、という思いがあって、美しいけど悲しいという複雑な世界があるということを理解できず、だからこそ強く印象に残っているのかもしれない。

残念ながら、作者名は覚えていませんが、その後、学校図書館で手に取った『にんぎょひめ』は幼稚園の記憶と重なるようなとても美しい本で『作：ハンス クリスチャン アンデルセン。絵：いわさきちひろ』と書かれていました。いわさきちひろという人は、日本の童話の世界を代表する本当に立派な偉大な画家の1人です。今でもたくさん描かれた絵本があるのでご覧になることがあると思いますが、私の母ぐらいの年代の方です。いわさきちひろさんが描いた『にんぎょひめ』の絵は、5歳のときの“なんて悲しくて美しい絵なんだ”という印象と少しも変わりませんでした。私が成長して、進路を考えると、いわさきちひろさんから大きな影響を受けました。女性で、家庭を持ったお母さんであり、お子さんを育てながら、第一線で絵本の仕事をされているということは有名で“できたら私もそんな仕事をしてみたい”と思いました。でも、簡単に絵本作家になれ

るわけではないので、絵の学校に行って、最初はイラストレーターからスタートしました。いろいろな絵を描いているうちに、出版社から依頼が来て絵本を作るようになって、私も『にんぎょひめ』を2冊描いています。

大人になって、私の卒園した幼稚園が記念の式典をされ、卒園生代表として話をする機会がありました。園舎は別の場所に移転して新しくなっていました。昔からいる先生が何人かいらっしやったので「当時の園庭に、エンジュかアカシアの木がありませんでしたか」と聞いてみました。幼稚園の園庭の大きな木の葉っぱが作ったレースのような黒い影を覚えていて、大人になってから調べ、葉の付き様から“エンジュかアカシアではないか”と思っていたのです。先生が「エンジュの木がありました」と言われましたので、“私の記憶は間違いなかった”と思いました。

この幼稚園時代の出来事と思い出が、私にいわさきちひろという人を知らしめ、絵本の魅力、“好きな先生に本を読んでもらうことがこんなに幸せなんだ、絵本ってなんて素敵なんだろう”という思いをずっと育ててくれたのです。現在の私の基本の基本は、園庭のエンジュの木の陰の下で絵を描いている私、そしてその私に声をかけてくださった先生、そして1冊の絵本。この要素がなければ、違う道を歩んでいたのかもしれない、と思います。この経験からも、保育園・幼稚園の先生方の仕事は、本当に尊くて、大切な仕事だと実感します。この中には、私のように幼児期に素敵な先生に出会われて、悲しいとき嬉しいとき大好きな先生がそばにいてくださり“その先生のようにになりたい”“その先生のような仕事をしたい”と思って先生になった方がたくさんいらっしやると思います。私は絵を描く仕事を選びましたが、先生方はきっと保育の仕事の尊さやすばらしさを、幼い頃から自分の身の上で起こる出来事として体感されていたのではないかな、と思います。

共同機構の研修会や研究プロジェクトなどで先生方の書かれた「エピソード」を読ませていただくと、よく観察してらっしゃるといつも感心し

ます。そして、事実を正しく誰にでもわかるように「エピソード」として書くのは、なかなか難しく大変なことです。研修で鯨岡先生からもお聞きしましたが、現場の先生方が、お忙しい中貴重な経験、体験を他の方とも共有するために「エピソード」として書かれていることは、素晴らしく、私も読んでたくさん勉強させていただいています。そんな先生方に、今日は少しリラックスして、絵の世界を楽しんでいただき、明日から元気にお仕事していただけると良いなあ、と思います。

3. イラストレーターの仕事

私の職業はイラストレーター、絵本作家、こどもみらい館長などいくつかあるのですが、どれか1つを選ぶとすれば、イラストレーターだと思っています。何かの目的のために描かれる絵をイラストレーションと言います。イラストレーションはイラストレイトという動詞からきていて、日本語に訳すと、絵で説明するという意味です。

何かの目的のために絵を描くだけでなく、文字は文字として読み取れるように考えて絵を描くのが、イラストレーターの仕事です。文字が読めなかったり、わからないようではイラストレーションとして採用されません。イラストレーターはいつでも自分の絵が何のために使われるのかということを意識して絵を描きます。1つの絵がいろいろなものに展開されています。

私のイラストレーターとしての仕事をいくつか紹介します。カレンダー、『大相撲京都場所』のポスター、銀行の通帳の表紙、母子健康手帳、蟠螂山の手ぬぐい、平安なでしこ交番のマーク、切手、電車やバスのラッピング、などなど。ベビー食器は、息子が1歳のとき作りました。その息子の子どもたちもその食器を使っています。代々使われているベビー食器なので、私も感慨深いものがあります。このように、いろいろなものに展開されますが、もっとも代表的で数の多いのが、絵本です。私は「絵本作家ではないのですか」と聞かれることもあります。絵本作家とイラストレーターは、少し違います。先ほどアンデルセン

の『にんぎょひめ』の話をしましたが、あの本の文章作家はアンデルセンで、私はそのお話に絵を描く挿絵画家ということになります。

4. 絵本作家とは

文章も絵も1人の作者が作るのが、正確に言う絵本作家です。文と絵を作るのでは、頭の回路の使い方が全く違うので、両方かくのはなかなか難しいことです。私の友だちの五味太郎さんは、まじりつけなしの絵本作家ですし、他にもたくさんいらっしゃいます。文章だけ書く人を童話作家、絵だけ描く人を挿絵画家と言います。私はどちらかと言われれば挿絵を描く方が好きかもしれません。自分で文も絵もかいたら、好きな物ばかりをかいてしまいます。挿絵だと普段めったに描かないものも文の中に出てきて、それを描かなければなりません。私の描く絵は、花や妖精、天使の絵がすごく多いです。でも、東京大空襲をテーマにした絵本を描かせていただいたときは、逃げ惑うお母さんや子どもたちの絵を描きました。描いているうちに胸がつぶれそうになりましたが、“描かなければいけない。これは重要な絵の役割だから”と思って描きました。このように、普段描けないものが描けるという意味では、挿絵の仕事がすごく好きです。絵本の仕事は“これから何冊か作っていくことになればいいな”と思っている仕事の一つです。

5. 絵本とは

絵本とは何か、絵本の構造についてお話しします。絵本は、基本的に物語（言葉）と絵画（挿絵）とによって構成されています。そして形は（変形のものもありますが）大体決まっています。A版とB版の2種類、A4サイズぐらいの大きさの物が1番多く作られています。大きな紙（全紙）に4ページ分を裏表に印刷するので、8の倍数のページ数で作られています。そうすると、紙の無駄をなくすことができるからです。実際の本では、表紙があって、それを開くと見返し、もう一度タイトルが出てくる扉（タイトルページ）があって、いよ

いよ本文です。本文は15見開きあり、その中で大体物語は完結します。そして、奥付けには、作者の名前や印刷会社、製本会社の名前、その本が何回印刷されているかが書かれています。

ロングセラーと言われるような絵本は、この印刷回数がすごく多いです。書店に並ぶとすぐに売れてしまって本がなくなる、だから出版社が再び印刷をして製本して、また書店に並ぶというわけです。1回目を初版と言い、初版本がすごく貴重だと言われますが、絵本の場合は残念ながら初版だけで終わるケースがたくさんあります。何度も何度も印刷を重ねている本は、奥付に数字がズラッと並んでいます。私が若い頃から現在に至るまでの長い間、断トツで1位の絵本、それは『いない いない ばあ』です。今の時点で2位との差がものすごく離れているので、おそらくこの先、数十年はこの本が1位でしょう。そして、2位が『ぐりとぐら』で、これもほぼ不動です。3位は新星のように現れた外国の絵本で、色彩の美しい絵画とシンプルなストーリー、エリック カールさんの『はらぺこあおむし』です。初めて見たときは、本当に大きな衝撃でした。これも素晴らしい絵本です。

優れた絵本の特徴というのは、まずシンプルなことです。『いない いない ばあ』も、シンプルで赤ちゃんから読み聞かせのできる絵本です。シンプルな文章の繰り返しで、小さい子どもはこの繰り返しがすごく好きで安心するのです。先生方も同じ絵本を何度も何度も「読んで」と言われたことがあると思います。安心できるということが、幼児絵本にとってとても大事な要素です。また、視覚も大事で、瀬川康男さんという素晴らしい大先輩が描かれたシンプルな絵です。私は、この本の『のんちゃん』の部分で、息子の名前に替えて読んで、一緒に遊びました。これもこの本の素敵どころです。わざわざ分析するのも無粋かもしれませんが、「いない いない ばあ」というシンプルで耳に心地よい言葉が繰り返されて安心する世界で、必ずみんながにっこり笑って「いない いない ばあ」をしている、この本が1位になる

のも当然のことかなと思います。

6. 文章に挿絵を描く

おひさま ぼかぼか はるのひの
おねぼうできる にちようび
なのにブタくん はやおきで
とことこ おさんぽ おかのみち
たんぼぼ いっぱいさいている
おはなばたけの まんなかに
あれあれ あれはなんだろう？

私が作ったこの文章に、みなさんが挿絵を描くとします。この文章の中でどうしても絵にできないものは何でしょうか。それは、日曜日です。カレンダーを描いて日曜日に○をつけてみることもできますが、文章に描いてあるので、日曜日を描く必要はありません。絵と文というのは、お互いに助け合ってページを作ります。では絶対に描かなければいけないものは何でしょう。それは、主人公です。これなしに絵本は存在しません。次に大切な要素として、景色があります。

では、この文章での主人公ブタくんのキャラクターをイメージしてみてください。ブタを描く場合、4つ足の動物のブタと2本足で洋服を着たような擬人化したブタの2種類に分かれます。皆さんの頭に浮かんだのは、どちらでしょう。私は“ブタくんは早起きしてどこかへ出かけようとしているから、何か目的があるのかもしれない”とこの文章の続きを想像し、擬人化した2本足のブタくんをイメージしました。擬人化した動物の絵で、一番難しいのが動作をする手の部分です。蹄のついた手では、本もめくれないし、料理もできません。そのため、今回私は、2本足で人間のような手のブタくんを描きました。でも、本当は2本足の動物の絵は“おかしいな、そんなの変だな”と思ってしまいます。文章作家に「このお話のブタくんは、4つ足ですか、2本足ですか」と聞くこともあります。「2本足です」と言われているのに、「私、2本足の動物を描くのは嫌いなんです」なんて言ったら、仕事にはなりませんね。

キャラクター設定の次に、場所や時間が大切で

す。この文章は、季節は春、朝早い時間、そしてタンポポの花がいっぱい咲いている丘の道、お花畑の真ん中で、ブタくんが何かを見つけます。最初に読者に“何が起こるんだろう、ブタくんは何を見つけるんだろう”と興味を持たせる重要なところ。ここでどうしても描かなければいけないのは、タンポポの花です。春の野原の光景なので、レンゲやツクシを描いても構いませんが、まずはタンポポを絶対に描かなくてはなりません。

タンポポというのは、夕方になるとしぼんで、日が昇ると開く花です。はやおきと書いてあるからといって、朝焼けのような風景にタンポポの花が咲いていたら間違いです。朝焼けの時間には、まだタンポポの花は咲いていません。絵本の挿絵を描くときには、そういったこともきちんと調べないといけません。

ブタくんはいつも朝寝坊で、日曜日の朝いつもより少し早起きしたという設定で、開いたタンポポをたくさん描いた方が、この文章の求めているものに答えることになる、と私は思いました。今回の研修のために、この文章に合わせて描いた挿絵です。今後、ブタくんの絵本がお目に留まったら、今回の研修に参加したみなさんが1番最初にこの絵を見たということになります。この挿絵はみなさんの頭の中のイメージと近いでしょうか。絵本の場合、あまり読者のイメージとかけ離れてはいけません。絵描きさんが絵本の挿絵を描きたがらない理由の一つに、挿絵は多くの条件を満たして、なおかつ読者の予想を裏切らない、読者以前に文章作家の期待を裏切らないものを描かなければいけないため、「そんながんじがらめなのは嫌だ」ということがあります。でも私は、挿絵を描くのが割と好きです。

絵を描くときに文章をどこに置くかは大体絵描きさんが決められます。絵本は、物語が進み流れていく時間とページをめくる行為とが一緒になっています。文章が縦に組んでであると右→左に、横に組んでであると左→右にページが開きます。改めて注意して見てくださると面白いかもしれません。お話によって開きたい方向も違いますが、

必ずしも文章が開きたい方向に組んであるわけではありません。この絵の場合、ブタくんが左向きに歩いているので、私は左→右に開いた方がいいと思いました。右のページに描いた小さな家は物語の少し前の時間を象徴しています。この家を描くことによって“ブタくんがここで暮らしていて、この道をトコトコ歩いてきたんだろうな”という過去のイメージを持ってもらうことができます。

まだ朝であることを象徴するために、空の色を薄くしました。この空が物凄く濃い青だったら、もうとっくにお日様が昇っている印象になります。空の色は薄く春霞のかかったような淡いブルーを使いました。そして、時間を描くことはできないので、絵の下の方の葉っぱにある水滴が、朝だということを象徴するちょっとした仕掛けになっています。まだ葉っぱに朝露がある時間に、ブタくんが元気に歩いていて“あれはなんだろう”と向こうの方を見ている、これが、私が描いた挿絵です。

色合いもとても大事で、ブタくんの洋服は黄色とブルーにしようと最初から決めていました。だから、それに合わせて背景や位置を決めていきます。このようにして、絵本は作られていきます。

7. 絵本における文章（物語）と絵画の役割

では、改めて物語と絵画の役割について整理してみます。物語というのは時間芸術です。物語の中には時間が流れていて、それは短い1時間ぐらいの場合もあるし、何10年という長い長い時の流れを表す文章もあります。そして、絵画は空間芸術で、1つの紙面の上に限られた形で、ある種の空間を表現する物です。時を語る物語とその1シーンを空間芸術として表現された絵とを重ねて作られたものが絵本の1ページということになります。先ほども説明したように、絵本において文章と絵画は互いに補い合い、助け合って情報を伝えることが必要です。文章があまり細かく表現されている場合、編集の段階で必ず削られます。絵本の文章は短いのが当たり前と思われるかも

しませんが、実は短くさせられています。どうしても削ることのできないギリギリのところまで短くしていることが多く、だからからこそ、本質が的確に伝わって非常に美しい文章となっているのです。

先ほどの『いない いない ばあ』でも、絵でキツネを描くので「しっぽの長いキツネさんが」などと書く必要はありません。文章と絵画がお互いに補い合う、助け合う、この役割分担が美しくなされているものがすぐれた絵本ということになると思います。文章では語れないものを絵画が示し、また絵画では示せないものを、文章が語る、例えば、心情(とても悲しいとかとても苦しい)は絵だけで表現するのは難しいです。こんなことがあってとても悲しい、と文章が書いてくれなければわかりません。そして、悲しそうにうつむいたり、涙を浮かべている絵を描くことによって、文章と絵が呼応し一つになっていくと言えるのではないのでしょうか。

8. 絵を見るおとな 絵を読むこども

「おとなは 絵を見るが こどもは 絵を読む」これは福音館の編集の松居直さんという方の言葉です。私たちが若いときに、たくさんのことを学ばせていただきました。先ほどのブタくんの絵に文章がなくても、子どもたちは「文章がなくてつまらない」とは言いません。「タンポポ咲いてる」とか「ブタさんだよ」とか「あれなんだろう」とか「何か不思議そうにしてない？」とか言って、いろいろな形で絵を読みます。文章が極めて少ない場合や、まったく文章がないページのような場合がわかりやすいと思いますが、子どもはそこに書かれていない文字や文章が形作る世界を絵から読み取ります。だから、私たちは「子どもたちが読むような絵を描け」と言われてきました。それは本当に難しいことなのですが、何年もいろいろ描いてきて少しわかる気がしています。1枚の絵の中に何か読み取れる要素があれば、子どもたちは立ち止まって、その絵を理解して読み込もうとしてくれます。松居さんは「絵本において、言

葉は絵となり絵は言葉となる」ともおっしゃっています。絵描きである私たちの立場から言いますと、文字がなくてもお話が想像でいるような絵を描くのが、絵描きの仕事だと思います。絵本において言葉は絵を連想させ、描かれた絵は言葉を連想させます。「いろいろな感情や心の動きを読み取ったり、自分の感性として受け取ったりできるのが絵本のすばらしさだ」とおっしゃっていました。

9. 絵本のできるまで

『クリコさんと笑わないクマ ワラクマくんのまいにち』

ある時、クマのぬいぐるみを買いました。何が入ったかということ、笑っていない所です。かといって怒っているようにも見えないクマさんでした。このクマのぬいぐるみを仕事場に飾って、何日も眺めていて“そうか、ぬいぐるみだから可愛くなきゃ売れない。だから、かわいいクマさん、笑ってるクマさんが多いのか。それなら、笑わないクマさんを主人公にしてみよう”と思いました。

まずは、主人公のクマのイメージイラストを描きました。先ほど話したように、最も重要な要素です。私は、主人公を自分の中で確立させるために、たくさんスケッチを描きます。このクマくんは、年齢的に8歳ぐらい(小学校2~3年生)をイメージしました。いろいろなことをしますし、いろいろなことを考える賢いクマくんです。働き者で、一生懸命にお手伝いしようとしします。お花を育てて、掃除をして、考え事をしたり、野菜を売りに行ったりもします。こういうクマくんのスケッチを、たくさん描きました。この段階でストーリーはできていませんが、笑わないクマなので『ワラクマくん』という名前を付けました。『ワラクマくん』のイメージイラストには、ぬいぐるみですからちゃんと縫い目があります。とても働き者の元気なクマくんで、人間の子どものくらい大きさが動きやすいと思いました。購入したクマのぬいぐるみは白だったのですが、私はクマくんはクマの色にしたいと思いました。『ワラクマくん』を気に入ったぬいぐるみ作家の方が、作って

くださった『ワラクマくん』のぬいぐるみは、私の作品の展覧会場でいつも椅子に座って登場します。

サブ的なキャラクターとしてクリコさんという造形作家が出てきます。この人は、魔法使いと言ってもいいようなちょっと不思議な人です。普段からいろいろなものを創るのが大好きで、小さなお店を持っています。クリコさんの名前から、コクリコ（ひなげし）をイメージして、お店の名前は『ひなげしや』です。クリコさんのイメージイラストでは赤色の縞模様や水玉、ケシの花の模様の服を着せました。私は、縞模様と水玉模様が大好きなんです。ヘアースタイルも大事です。“ショートカットにしようか、個性的な感じにしたいなあ”といういろいろ考えていましたが、あるときクリコさんのイメージにぴったりの方を電車で見かけました。その方は、長い髪を束ねて無造作にゴムで留めていて、その毛先がピンとはねていて、それがすごくかわいくて「これだ!」と思いました。もう1人の重要なキャラクター、クリコさんが決まりました。

キャラクターが決まると実際にストーリーを作り上げて、絵を描いていきます。絵を描くとき私は、線画でまず基本形を作ります。かなり正確に線画を作りますが、最終的には線はすべてなくなり、面で絵を構成します。

地下鉄北山駅近くのお店の裏口にあるドアが、すごくかわいくて“これ『ひなげしや』にいいな”と思いました。『ワラクマくん』は、クリコさんとクリコさんの創った仲間（他のぬいぐるみ）たちといるときは、お話もできるし動けるんですが、他の人間が『ワラクマくん』を見たときは、ただのぬいぐるみになります。お店の前の椅子に座っているのが『ワラクマくん』の1つのお仕事です。お店の中には造形作家のクリコさんの作品が並んでいます。簡単に造形作家と言いますが、実際にクリコさんの創っているものを描かなくては いけませんので”造形作家にしなきゃよかった”と途中で後悔しました。

どこが舞台なのか、外国か日本か、田舎か都会

か、物語に出てくる風景はすごく重要です。『ひなげしや』は、私の大好きな小樽の町の、どこかの坂道の途中にあるお店、と設定をしました。絵本の風景はスケッチした実際の小樽の風景を基にして描いていきました。

10. 『クリコさんと笑わないクマ

ワラクマくんのまいにち』

それでは最後に、私が読み聞かせをします。オリジナルの物語で文章も絵も私がかきました。

『クリコさんと笑わないクマ

ワラクマくんのまいにち』

実は『ワラクマくん』は、私の息子がモデルになっています。形はぬいぐるみのクマから取りましたが、例えば最後の方に「ねえ、早く寝て、早く起きたら、早く大きくなれる?」というシーンがあります。小さな息子が私にそう聞いたことがあります。私は、大きくなったからといって悲しいことや苦しいことがなくなったり、何でも好きなことができたりするわけではないことが、よくわかっている大人でしたので、実の息子が真剣な顔をしてそれを聞いたときに「そうかなあ」と答えました。そして「そんなに早く大きくならないでほしいわ」というのは、その時私が実感して息子に言った言葉です。この物語を作る時、私は思いがけず息子が言ったことを思い出し、長いときを経て、そういうものが自分の中に思い出として残っていることを“本当に幸せだな”と思いました。多分この本は、私がお母さんじゃなかったらかけなかった絵本だろうと思っています。

11. 息子の幼稚園時代の思い出

私の息子は、もう3人の子どものパパですが、幼稚園のとき、まゆみ先生というとてもかわいらしい先生に担任していただきました。

ある日、息子は帰ってきて「僕は大きくなったらまゆみ先生と結婚する」と言いました。先生方にも「先生と結婚したい」という子どもさんがい

らっしゃるのではないかな、と思います。残念ながらまゆみ先生は、息子が卒園するのを待たず結婚してお辞めになりました。息子が3年生ぐらいの時に、まゆみ先生にバツタリお会いしました。先生はちっとも変わらず、でも以前担任していた当時の息子のようなちっちゃい男の子を連れていらっしゃいました。私はすぐにまゆみ先生だとわかって「こんなに大きくなったんです」と言いましたが、息子はもじもじしてどこかへ行ってしまいました。家に帰って「まゆみ先生に会えたね」と言うのと「まゆみ先生、髪の毛切ってた」と言うんです。長い髪の毛のまゆみ先生が好きだったんでしょう。

私はその頃に先生が書いてくださった園の連絡帳を今でも大切に持っています。私のキャリアのスタートは、保育園や幼稚園で使う教材や雑誌に小さな絵を描くことで、息子が幼稚園の時使っていた出席ノートの表紙は、私の描いたものでした。息子は、動物の絵の小さなシールを貼ってもらうのを、毎日楽しみにしていて、帰ってから嬉しそうに私に見せてくれていました。そんな息子を見て“ああ、素晴らしいお仕事をさせてもらっていたんだなあ”と実感していました。私は、生涯子どものために絵を描く絵描き・イラストレーターでありたいと、今も変わらず思っています。

お約束の時間が来ました。長い時間ご清聴いただきまして、ありがとうございます。

12. 質疑応答

Q：絵を描くことを仕事にされていますが、絵を描くとき、どんな気持ちで描かれていますか。

A：すごく大事な質問だと思います。

私は京都が大好きで、京都の学校を選び、京都の会社に就職して独立しました。仕事をするには東京へ行った方がいいんじゃないかな、と考えたこともありました。そんな京都の片隅にいる私のもとに、あるとき、やなせたかしさんからお手紙が届きました。その当時はアンパンマンはまだ描いていらっしゃらなかったけれど『手のひらを太陽に』など、良く知っていましたので“あのやな

せたかしさんなのか”と思って手紙を開けてみました。「今度新しい雑誌を作るので、その準レギュラーとして、あなたに絵をお願いしたい。もしOKしてくださるなら、1度会社に来てください」という内容でした。その新しい雑誌は、子どもたちが投稿してくれた詩に、プロの絵描きが絵をつけるというものでした。手紙には「子どもたちのための雑誌を作るのにふさわしい絵を描く人を探していた。あなたの描いた絵を見て、僕はこの人だと確信しました。是非この仕事を引き受けてほしい」と書いてありました。友だちは「これ絶対詐欺だ。そんなわけない」と言いましたが、“私をだましても何の得にもならないし、このサインは確かにやなせたかしの物だ”と思い、出版社に電話しました。事情を伝え、東京に行き、初めてやなせさんにお会いしました。

その後、「なぜ京都の無名な私に、この仕事をしてほしいと言ってくださったんですか」と聞いたことがあります。やなせさんは「あなたの絵を見ると、愛されて育ったことがよくわかる。愛された人にしか、人に愛される絵は描けない」とおっしゃいました。また後日、やなせさんが「今度の絵、良かったね。この子が将来日本を代表する詩人になるかどうかはわからないけど、間違いなくあなたは、この子にとって永遠に自分の詩に絵を描いてくれた、世界でただ1人の絵描きさんなんだよ。こんな幸せはね、子どものために絵を描く人にしか与えられない。あなたはその絵を描くために生まれてきた。だから、死ぬまでそういう絵を描きなさい」と言ってくれました。

だから私は、自分の気持ちが悲しくなったり、ものすごく嫌な暴力的な気分有的时候には絵を描かないようにしています。自分もその絵が好きで、見た人も幸せな気持ちになってくださると確信しない限り、絵を描きません。だから、描かないときもありました。母が死んだとき、阪神淡路大震災のときもそうです。描くときは幸せな絵を描きたいと思っています。

Q：小さいときに郵便局で可愛い切手を見てから、

先生の絵が好きになりました。子どもたちと絵を描くとき、私たち保育者に対して願いがあれば教えていただきたいです。

A：正直に申し上げますと、私は子どもたちの絵にはかなわないと、いつも思っています。これまでも、子どもの描いた絵の展覧会を、たくさん見せていただきましたが、もう本当に感嘆という言葉しかありません。「すごい！これは私たちには描けない」という絵がたくさんあります。実際に園で描いているところを見せていただいたこともあります。人間の成長の過程で、あんな絵が描けるのはごく限られた時期のような気がします。つまり、幼稚園児・保育園児と言われる時代にしか描けない絵です。私がいつも感動するのは、その絵から伝わってくるエネルギーというか、生命力というか、一言でいうと楽しいということ。コンクールに出して一等賞になろうとか、褒めてもらってご褒美をもらおうとか、そんなことは関係なく“本当に楽しい、だから描きたい”と夢中になって描いているのが伝わってきます。それは園の先生方が、その環境を作ってらっしゃるからこそできることです。家ではなかなかできません。そこら中に絵の具が飛び散って、後が大変です。大きな筆で絵の具を使って存分に描かせてもらうという経験は、その時代を過ぎるともうそんなにできません。実は私の孫娘も、幼児期にとってもいい絵を描いていて大事にとってありますが、今の彼女が描く絵からは、以前私が感じたものもう伝わってきません。多分それは、何かと引き換えに失ったものなんじゃないかな、と思います。無心に描く喜びを体験して、その子どもたちが必ずしも絵描きになるわけではないけれど、そういう環境を先生方が作ってくださっています。うちの上の孫娘は卒園式のとき、スカートの裾が絵の具だらけでした。それは、彼女にとって素晴らしい経験で、私たちにとっても素晴らしい思い出です。まずは、そういう環境を作ってくださる園の先生方に、絵を描く者の1人として本当に心から敬意を捧げます。子どもたちには、今の時期にこそ好きに描かせてあげてほしいです。形をしか

り描くことよりも、印象を直感的に色や形に表現する力のある、子ども時代でしかできないことをやってほしい、と思っています。私は、京都市にぜひ子どもの絵画美術館を作ってほしいと思っています。大人になってから見たら“自分はこんな絵が描けたのか”ときっとびっくりすると思います。今は“絵は苦手だ”と思っていても、幼児期に絵を描いていた時間というのは、非常に幸せな、恵まれた、限られた時間だったと思うはずです。

私の両親は、私たち3人の子どもに「家中どこに落書きしてもいい」と言ってくれていました。ですから私は、大きな白い壁があると何か描きたくなります。子どもの頃、親せきの家に遊びに行ったとき、白い壁に落書きをして、おじさんに思いつき頭をたたかれました。そのときに、泣きながら“ああ、うちのお父さんとお母さんは特別なんだ”と思いました。私が息子に同じことがさせられたかという、賃貸住宅ではできません。あれは田舎の大きな古い家で少々落書きがあっても平気な環境だったんだ、とは思いますが、両親が私に与えてくれた最大のプレゼントです。褒めてもらいたいとかではなく、ただ白い壁に向かって思いつき描く喜びを与えてくれたことが、私の現在の絵を描く喜びに繋がっていると思います。ぜひ、幼稚園・保育園時代にできるだけたくさん思いきり描く機会を与えてあげてほしいな、と思います。

Q：感想になりますが、0歳児、1歳児を担当することが多く、お話を聞いて、自分は紙に描かせたがっていたな、と思いました。余白があると「こっちに描いたらいいよ」と声をかけたり、知らず知らずに形にさせようとしている自分を振り返りました。はみ出したり、ずっと同じところに描いて紙が破れたり、机に描いたりしていると、周りの目も気になって「紙の上に描いてほしい」と言ってしまうこともありました。今回のお話を聞いて、描くことの楽しさを感じられるように見守っていくことが大事だと思いました。

A：絵を描くことだけでなく、夢中になれることというのはすごく大事なことです。夢中になって集中することで、得られるものはたくさんあると思います。大人は、完成したものをイメージして「もっとここに描いたら」とか「ここに描くと楽しいよ」とつい言いたくなるんですけど、できるだけ子どもたちの描きたい気持ちに寄り添ってあげるのがいいような気がしますね。

Q：小さい頃使っていたピアノの教本に永田先生の絵があり『もえ』という小さい文字を探すのを楽しみにピアノを練習していました。

日々保育する中で、色の持つ力がたくさん場所があり、環境の一つとして色で大きく変わることがある、と実感しています。先日も濃い色の画用紙に白いクレヨンで描いた子どもが「先生、白ってすごい色やなあ」と言っていて、私も共感しました。永田先生がたくさんの色に出会われる中で、大切にされていることがあれば教えていただきたいです。

A：色彩が心に与える影響というのは、ものすごく大きなものです。暖色、寒色、明るい色、暗い色などという呼び方もあります。私は色彩の魅力は、組み合わせだと思っています。例えば、赤い紙の上に白いクレヨンで描くと赤と白の対比がとても美しく鮮やかです。

『絶対音感』という言葉がありますが『絶対色感』という言葉もあります。どちらも神から与えられたものですが、色彩感覚は、天性のものだけではなく、記録し蓄積することができます。優れた色彩感覚の持ち主は色の記録ができます。私たち絵描きもよく色彩感覚をトレーニングしますし、絵を志す学生さんにも、そのような講義をすることがあります。

色彩感覚は経験と知識で積みあげることができるので、小さいときから、明るい美しいものを与えてあげてほしいです。先ほど『こどもは絵を読む』と言いましたが、先生方が色彩の美しいもの、色彩感覚のいい画家が描いた絵本を意識的に選んでいただくことで、子どもたちの中に知らず

知らずのうちに、絵の知識、色彩の知識が増えていくわけです。それは大人になったら遅いということでもなく、“今日の研修の講師がどんな色の服を着ていたかな”と意識して覚えようとするということでもトレーニングになります。

お使いになっていたピアノの教本は、子どもたちが1曲マスターするまで退屈しないように、と絵を描いた画期的なピアノ教本でした。絵の中の『もえ』というサインを探して「サインがあったりなかったりするのはどうしてですか」と質問もいただくのですが、書くのを忘れていました。このピアノ教本は、おそらく私の描いた中で、最もたくさん子どもたちに見てもらったものだと思います。

令和4年度第2回共同機構研修会

令和4年5月25日

於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館